

「池上秀畝」誕生



修業時代、そして中央画壇デビュー

池上秀畝は本名を国三郎といい、1874(明治7)年、現在の長野県伊那市高遠町に、紙商兼小間物店「紙庄」の次男として生まれました。祖父の休柳、父の秀花は絵や俳句、茶道などをたしなむ趣味人で、幼い頃の秀畝は、芸術的な家系の中で自由に育ちました。絵を描くのが好きで、時には父親の目を盗み、店の紙や絵具を持ち出して、絵のけいこをしました。

1889(明治22)年、15歳になった秀畝は上京し、画家・荒木寛畝に弟子入りをします。寛畝はその翌年、第3回内国勸業博覧会で妙技2等を受賞したことで、その画名を高め、その後も中央画壇の重鎮として活躍していくこととなります。秀畝の修業時代、師・寛畝は、模写指導をおこなう一方で、「写生」を義務づけていました。寛畝は旧態依然とした伝統的画法に飽き足らず、科学的、解剖学的な洋風画法を加味して、写実に基づく日本画をめざしました。

秀畝は上京前から「国山」という雅号を使っていましたが、父・秀花の「秀」と、師・寛畝の「畝」を合わせた「秀畝」という雅号を寛畝から与えられ、1894(明治27)年、20歳の時に初めて展覧会への出品を許されました。同年、「秀畝」の雅号を引っ提げて出品した日本美術協会の第6回展で2等賞を受賞し、中央画壇でのデビューを果たしました。1906(明治39)年には日本美術協会の委員に就任し、団体の中核となって活動していくこととなります。



《国之華》1924(大正13)年 紙本金地着色 皇居三の丸尚蔵館

1924(大正13)年、皇太子(昭和天皇)の婚礼の祝いの品として、男爵藤田平太郎により秀畝に依頼、制作された。右隻に日本を表す桜の大木を、左隻に皇室を表す菊の花を、紅白咲き乱れる様子が描かれる。桜や菊の花びらは、胡粉を盛り上げて彩色をほどこし、立体感ある力強さで、金地に負けない存在感を放つ。左隻には豊かに咲く菊の花に竹垣が配され、右端には細い流水が流れる。

長野県立美術館で2024年5/25～6/11に展示予定



《旧高遠城之真景》明治20年代 紙本著色 高遠町歴史博物館

本作は西の方角から高遠城を眺めた構図の名所絵となっている。各曲輪の名称、周辺の寺社の名称、武家地の地名などが書き込まれている。また、当時あった建物、助勤曲輪や笹曲輪にあった稲荷社も描かれており、高遠城の建物の研究材料にもなっている。高遠城は1872(明治5)年に廃城したため、本作は在りし日の姿を偲ぶ目的で描かれたものといえる。父・秀花がよく似た図を描いていることから、それを元図にしたと考えられている。

高遠町歴史博物館で2024年2/23～3/20、5/9～6/16に展示予定



《日蓮上人避難之図》1911(明治44)年 絹本着色 (一財)北方文化博物館

第6回読画会出品作品。名越の小庵で読経を終えた日蓮の前に白猿が現れ、その猿に衣の袖を引かれて山中へ入っていく。そこで、小庵を振り返ると火炎が上がっているという、日蓮伝記中の、いわゆる松葉ヶ谷の法難と呼ばれる場面が描かれている。日蓮や白猿の姿態、表情や目線には物語を導く綿密な計算が施され、猿の白毛から樹木の葉一枚に至るまで濃密な描きこみがなされている。人物・動物表現における秀畝の筆力を十分に発揮した作品。

練馬区立美術館では2024年3/16～31、伊那文化会館では4/27～5/12、長野県立美術館では5/25～6/30に展示予定

※展示期間変更の可能性あり



《桜花雙鳩・秋草群鶉図》1921(大正10)年 絹本金地着色 練馬区立美術館

絹本金地の煌びやかな画面に対角線構図で春と秋の花鳥が描かれている。桜の枝から飛び立っていく鳩に、一方は両足を踏ん張り獲物を見定めるかの如く首をもたげ、いずれも躍動的な描写である。これに呼応する左隻は可憐な草花が咲き、丸い鶉が転げるように配される。動と静、写実性と装飾性といった二項対立、異質感が一對にまとめ上げられている。

練馬区立美術館では2024年4/2～21、長野県立美術館では5/25～6/11に展示予定

写生をする秀畝



《蜀栈道》1928(昭和3)年 紙本着色 個人蔵

秀畝が主催していた伝神洞画塾第10回展に出品した作品。蜀栈道は長安と成都を結ぶ、秦嶺山脈超えの道のことをいう。栈道とは切り立った山腹や崖に沿って、木材で張り出して設けた道のこと、通行にも大変な危険が伴った。秀畝の画中でも切り立つ岩が重なるように描かれ、崖から不自然に道が飛び出して作られた栈道や峡谷に掛かる木製の橋など交通の難所であることは伺える。しかし、全体としては、緑青の彩度や濃淡を変えて作り出した明るい色彩や、細密な点描を用いた樹木の描写が物語性のある温かみを感じさせる。

伊那文化会館で2024年3/30～5/12に展示予定

一途に画道を求めた人生

志高く、活躍は遠く世界まで

秀畝は、1915(大正4)年に師・寛畝が亡くなった後、寛畝の主幹した「読画会画塾」を中心となって支え、自らも「伝神洞画塾」をおこし、後進の育成に取り組みます。

中央画壇では、日本美術協会系の作家を「旧派」、日本美術院・日本絵画協会系の作家を「新派」と呼ぶようになり、主導権争いは熾烈さを増していきました。その中で、秀畝は伝統に立脚した日本画の近代化をめざし、花鳥画や山水画を再び生氣あるものへと努力しながら、作品制作に心血を注いでいきました。そして、1916(大正5)年の第10回文展から、3回連続で特選受賞するという快挙を成し遂げます。その後も文展が帝展、新文展へ移行する中で出品を続け、1944(昭和19)年に東京の自宅で亡くなるまで、衰えることなく絵を描き続けました。

中央画壇で活躍した秀畝ですが、1929(昭和4)年には、フランス・パリで開催された巴里日本美術展覧会、1939(昭和14)年には、アメリカのニューヨーク万国博覧会に出品するなど、日本文化の紹介にも貢献しています。また、長野県伊那市・高遠城址公園内にある高遠閣(国登録有形文化財)の建築にも尽力するなど、故郷の文化振興にも寄与しています。

秀畝は自伝(『池上秀畝口述控』)の中で、「本当に巧いものを描けば、宣伝もいらなければ、紹介もいらぬ。人を感動させる芸を見せればよい」と言っており、純粹に画道を求めた人生でした。

《桃に青鸞図》1928(昭和3)年 板戸着色 オーストラリア大使館

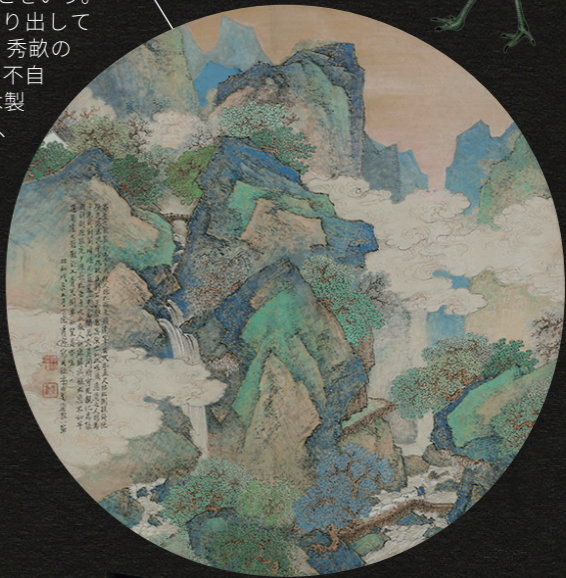
旧大名家、蜂須賀侯爵邸の杉戸絵。秀畝芸術の絢爛さを目の当たりにできる名作であると同時に、秀畝を代表とする旧派の画家たちが皇室や華族らに好まれた、その仕事の領域を垣間見ることができる。裏面には松に白鷹図が描かれる。

練馬区立美術館では2024年3/16～4/21、長野県立美術館では5/25～6/30に展示予定

《渭塘奇遇》1927(昭和2)年 紙本着色 信州高遠美術館

第8回帝展に出品された本作は、中国明代の文人・瞿佑の怪異小説集『剪燈新話』内の、川の堤で男女が思いがけない出会いをするというストーリーに取材している。秀畝は現地・中国の風景や風俗に取材し写生を重ねることによって、縦260cm、幅137cmという大画面に、実に高い解像度で、まさに男女が出会う場面を描いている。

信州高遠美術館で2024年3/2～5/19に展示予定



《秋日和》1934(昭和9)年 絹本着色 京都大学人文科学研究所



第15回帝展出品作。庭の一隅に、蓮が植えられた素焼きの水鉢が置かれ、6羽の七面鳥が遊ぶ。鏡木清方が「そのうまさを味って倦むことがない。」と絶賛したほか、本作は批評家から好評を持って迎えられた。

練馬区立美術館では2024年3/16～4/21、長野県立美術館で5/25～6/30に展示予定



《決闘》1943(昭和18)年 絹本着色 信州高遠美術館

第6回新文展に出品された本作は、軍鶏が力強く格闘する姿が画面一杯に表されている。余白をとった画面の中に、鋭い観察眼と達筆で表された軍鶏の姿は、戦いの中の一瞬の静寂と臨場感とを同時に見せている。太平洋戦争中の、きわめて特殊な状況下で生まれた本作は、戦争という時代の制約も純化し、卓越した写実力で作品に昇華した、秀畝最晩年の傑作と言える。

信州高遠美術館で2024年3/2～5/19に展示予定

